

私にとっての才能教育

(東京外国語大学教授
国際関係論・現代中国学)

中嶋 嶺 雄



左から筆者、佐藤陽子さん
鈴木先生、宮沢進先生

才能教育の成果が一堂に花開く恒例の全国大会二十五周年を記念するレセプションが、三月十七日夜、ホテル・ニューオータニでおこなわれた。お招きいただいた私にとっても、感慨深い一夜であった。

相変わらずにお元氣な鈴木鎮一先生と久しぶりにお話できたばかりでなく、鈴木静子先生や松井宏中先生など松本音楽院時代の先生方、それに私より年下で揃って優秀な生徒であった鈴木裕子さん、村上豊君らとほぼ二十五年の歳月を経て再会することもできた。松本音楽院時代から才能教育を支えてこられた関係者の方々の労にたいしても、改めて敬服せざるを得なかったが、当夜は、戦後間もない頃の松本音楽院のフィルムも上映されて、想い出のなかの影絵のような残像が久方ぶりに色彩られたような気がした。

光栄にも私はレセプションでなにか挨拶

するように指名を受けたのだが、さらに重ねて想い出の一端を本誌に書くよう青本謙幸先生から依頼された。

そのお申し出を有難くお受けしはしたものの、私はいささか当惑気味のまま今日にいたっている。その一つの理由は、そうした想い出話については、すでに五年前、一連の文章を求められるままに書いてしまったからである。ファイイルを開いてみると「私とヴァイオリン」(『文芸春秋』一九七四年三月号)、「松本音楽院のころ」(『信濃毎日新聞』一九七四年九月九日)、「鈴木鎮一先生・信念にもとづく音楽教育」(『教育ジャーナル』一九七四年十一月号)などの文章が出てきた。もう一つの理由は、私は松本音楽院のいわば第一期生ではあったが、決して優秀な生徒ではなかったし、私が初めて鈴木先生の門下にあつたのは、たしか昭和二十二年の初頭、小学校四年生のときであつて、すでに才能教育の対象としては、ややのみ出した存在でもあつたからである。その頃、鈴木先生は、すでに江藤俊哉、山本恵子(故人)、豊田耕児、小林武史・健次兄弟、鈴木秀太郎といった国際級ヴァイオリニストを育てられ、そうした輝やかし

ことでした。とにかくすばらしい響きのホールで、百二十年前の建物ですが、木造の大天井も釘をつかわず、木の組み合わせで出来ている、建築界の貴重な研究資料とのこと。正面には、立派な大パイプオルガンがついています。

四月四日、午前十時からは、ユタ・ホテルの集會室で、この地方の鈴木メソードの先生方の集まりが計画されており、五十名ほどの先生達と、鈴木メソードの教育法とその指導法の研究会を、お昼まで致しました。

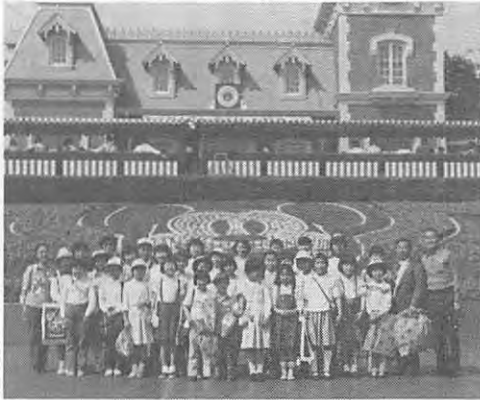
そして午後二時過ぎ、ソルトレークの空港へ一同参りました。空港には、生徒達が泊めていただいた家庭の皆さんが多数見送り、子供達も別れを惜しんで、泣いている子もいました。とにかく、温かく迎えられた、忘れられない思い出となることでした。

さて次は、生徒達の待望のロスアンゼルスです。翌五日は、午後一同デイズニールランドへ遊びに行くのです。デイズニールランドが六で、コンサートの演奏は四ぐらいの割合で、子供達は今回の旅行に出か

けたことと思います。

ロスアンゼルスでは、ミルズ先生御夫妻、コリーナ先生御夫妻、セロのバーバラ・ワンプナー先生やスーザン・シールズ先生、リー先生御夫妻等、なつかしい先生達が多数迎えて下さり、嬉しい限りでした。

そして、五日の午前十時から、宿舍のビルティモア・ホテルの大ホールで、二百人の生徒達の合同レッスンを松本の生徒達



デイズニールランドにて

と共に行ないました。速くはテキサス州からやってきた生徒や先生もありました。アメリカの生徒達の成長もまた嬉しく、音がとても立派になってきたのは、うれしいことでした。先ず、エクレスのソナタから始まり、松本の子供達も一緒に弾いたりして、国際交流の、楽しい立派な演奏でした。アメリカの先生達の熱心な研究心には、すばらしいことと、いつも感心させられます。生徒や父兄や先生達で、大ホールも超満員、七百人ぐらゐの集まりでした。十時から十二時まで二時間、楽しくあれこれとグループ・レッスンをやりました。また中間で、清水なぎさちゃんのモーツァルトのファンタジーの演奏も皆さんに聞いてもらい、大きな感動でした。とにかく、楽しくすばらしい時間でした。

どこでも、温かく心から皆さんに迎えられて、ほんとうに、鈴木メソードの音楽教育によって強く結びつけられた国際友情の美しさと深さを、しみじみと知らされたすばらしい旅でした。

い成果のうえで、松本音楽院では前記の方々や山田絃子さん、大池脩子さん、眞峰紀一郎君などの才能を育成しはじめていた。

私は、いささか年長であつたこともあつて、私たちが兄事していた「耕ちゃん（豊田耕児氏）」が鈴木先生からレッスンを受けるときの真摯な姿と、その莊嚴なまでの音楽的雰囲気は圧倒されつつも、生半かな才能と技術では、いかに音楽が好きでも専門家の道を歩むべきではないことを、おのずと自覚させられたのである。私が本稿の執筆に戸惑いを感じた最大の理由は、ヴァイオリンの道を職業として選ばなかつた私が、才能教育について、これ以上、語るべきものをもち得ないという私自身の事情に由来するといふべきであろう。

だが考えてみると、鈴木先生の才能教育は、ときにはそれが「天才教育」と誤解されることもあるにせよ、それは決してヴァイオリンの天才、音楽の専門家の育成のみを目的とするものでないことも自明であつた。どんな子供でも自由に母国語が話せるように、どんな子供でもバツハやモーツァルトの音楽にみずから参加できること、い

わば音楽の普遍性を等しく万人に解放することに、鈴木先生の一貫した姿勢があつたはずである。

とはいえ、こうした理想が個々人において現実化するプロセスが決して安易なものではないことも、私があえて指摘するまでもない。想起してみると、鈴木先生のレッスンは、先生の号令でボーイングを変化させたり、楽節を曲の途中から突然弾かせたり、そういったヴァイオリン・レッスンのゲームによつて生徒を導びく手法においてユニークであり、興味のつきないものであつて、楽譜も重要だが、すべてを暗譜してはじめて音楽を自由にする、つまり自らに解放することができると、知らず識らずのうちに教えてくださったが、こうしたレッスンの反復はある意味で大変厳しい教育なのである。鈴木先生は、「ヴァイオリンは一日弾かないと二日分退歩する」とよくいわれた。このようなくまき反復のなかに、音楽の偉大な精神を体得させること、こうした方法を私自身の体験に引き寄せてみると、それは外国語教育にもそのまま通ずるものであるばかりか、同時に人生のたかいたかによつても、もつとも基本的な知識

や技芸を厳しく幼体にさずけるという「孟子」に発する「教育」という語の東洋的文脈においても、ラテン語の *educare* → *educatio* から *education* に連なる西洋的文脈においても、まさに本来的な意味における教育の本質につながり得るのである。

こうした実験を国境を超えて見事に結果させた才能教育の成果については、いまさら指摘するまでもないであろうし、具体的には、わが国の音楽の水準がとくに弦のレヴェルにおいてきわめて高くなつてきていることも周知のところであろう。

しかし、こうした環境においても、そこに多くの問題が存在しないわけではない。今日では、ヴァイオリン人口もピアノ人口もわが国は幼時のお稽古事としては世界有数のものであるが、受験競争や管理社会での競争の激しさのためか、せつかく、そのようにして幼時からヴァイオリンやピアノに親しんでも、それを成人段階にまで持続させるのはなかなか困難なようで、私の周辺を見回してみても、職業として音楽の道を選ぶ者以外は、まず最初は高校生のころ、次にはせいぜい大学生のころまでで終つてしまい、ひとたび中断すると、それま

での厳しい日課の反動のためでもあろう、すつかり生活から遠い存在になつてしまふことが多いのである。これは大変惜しいことであるばかりか、あえて大袈裟に表現すれば、一つの文化価値の内部的喪失であるような気がする。このことはちょうど、中学から大学まで十年以上も英語を学びながら、その英語が一般には実社会で役立たず、錆びついてしまふことが多いという現実と類似しているのかもしれない。もつとも英語の場合には、わが国の一般の英語教育そのものに大きな問題があるのであつて、才能教育の場合とは裏腹の関係にあるといえよう。

ともあれ、このあたりの問題をどう考えるのが、才能教育を受けた者の将来の職業選択の問題とともに、すでに四半世紀を過ぎて膨大な才能教育人口を世に送り出した才能教育の、今日の段階における一つの問題点であるのかもしれない。そして、このように考えてくると、結局は、才能教育の受け手の側の主体性という問題になつてくるのではなからうか。もとより、これらの問題は一般に、わが国の教育のあり方そのものもつ問題点とも相関的であること

はいうまでもない。私自身、現在四人の子供をもち、ピアノ、ヴァイオリン、フルートを一応は習わせているが、研究生活のためしばしば外国で生活してみると、たとえれば日本の場合、多くの母親はレッススが終つて帰宅する子供にたいし、開口一番「今日はどこまで進んだの?」と質問するのにたいし、アメリカでは「今日は楽しかった?」と聞く。オーストラリアでは母親は、子供たちの将来の職業選択にまず第一の関心を示し、どんな学校へ進学するかは二の次で、学校は職業選択の道に沿つて選ぶのが普通である。

こうした問題点をふりかえりながら、いささか手前味噌になつて恐縮だが、そのあたりの私自身の体験をここに書いてみよう。先にも記したように小学校四年生でヴァイオリンを始めた私は、豊田耕児氏のような存在を目のあたりにして、とうてい専門家の道を歩むことなどできないことを自覚していたが、深志高校一年生のときに、家業に起つた不幸な事情のため鈴木先生の許を離れて以来も、今日までヴァイオリンをともかくも続けている。先日のレセプションの壇上で再会を喜んで下さつた鈴木先生

は、「明日、武道館で子供たちと一緒に弾けますか」とおどけた質問を浴びせられたが、従つて、決してうまくはないけれど、今でも自分が練習した曲は弾くことができ。たしかに、多忙にまぎれて、このところヴァイオリンを手にする日は少ないが、それでも大学生の頃はオーケストラでコンサート・マスターをやらされたり、大学祭に中野公会堂で独奏したりもした。

中学生の頃から始めて、長野県展には毎年入賞したり、スポーツでは陸上競技(短距離)のキャプテンでもあつた私は、しかし、家業に起つた不幸を契機に大人の社会の醜悪な断面に接したためか、社会の動き、政治の動き、世界の動きに多感な少年の日々を過し、当時、中国革命間もない新生中国の胎動に目を開かれていった。

そのような現代中国を研究してみたいと志向した私は、そのためにはまず言葉をと考へ、東京外国語大学で中国語を修めた。一時、学生運動のリーダーにもなつたが、やがて東大の大学院に進んで国際関係論を修得し、本格的に学問の道を歩むこととなつた。いまでも想い起すのは、ちょうど大学三年生のとき、いわゆる動評闘争が起り、

若気のいたりであろうか、当時の全学連オ
ルグとして和歌山へ向ったが、その夜は、
都民交響楽団の定期公演が日比谷公会堂で
あり、東京駅で演奏会用の服装を着がえ、
ヴァイオリンを友人にあずけて列車に乗っ
たこともあった。

異例なことではあったが、すでに大学院
時代に中ソ論争を直視して執筆した私の最
初の著書『現代中国論——イデオロギーと
政治的内的考察——』を青木書店から出版
し、中国研究者としての道を進みはじめた
とき、中国では文化大革命が起った。激動
の中国に単身飛んだ私は、上海で、紅衛兵
の女の子のピアノ伴奏で「東方紅」を即興
で弾いたが、文化大革命の時期に、このよ
うな特筆すべき体験をもち得たのはやはり
ヴァイオリンのお蔭であつたと思う。外務
省特別研究員として香港に留学したとき
は、シティー・ホールでの合奏が写真入り
で現地の新聞に出て、いささか当惑した次
第である。

今日では、たとえばウィーンでの国際会
議に出かけたり、ソ連の科学アカデミーに
招かれてモスクワに滞在したり、最近では
オーストラリア国立大学の客員教授として

キャンベラに滞在したりする機会ごとに、
音楽会だけは欠かすことなく、また、十年
来の懸案の研究を集成した私にとつては十
冊目の著書『中ソ対立と現代——戦後アジ
アの再考察——』を最近、中央公論社から
出版したが、外国でこうした著作の完成に
没頭するあい間に、ヴァイオリンはかけが
えのない息抜きになっている。

こうして、私はどうやらヴァイオリンを
ともかくも身近かに置いているのだが、私
が主任教授をつとめる私の大学の国際関係
論のゼミナルに参加する学生のなかにも、
語学を得意の学生と才能教育とは相関関係
が高いのであろうか、才能教育の体験者が
何人かいるので、私は、しばしば彼らと合
奏するという楽しみも得ることができ
る。そして、私がいつも学生たちに向つて厳し
く指導することは、まず語学から解放され
ること、そうして上手でなくてもよいから、
今日の国際関係なり、現代中国の動向なり
を、自分の専攻語学と国際語としての英語
との双方で表現し、そうした論理的な意思
表示ができるようになること、この関門を
是非とも乗り切ることであるが、幸にして、

昨今では、そのような関門を見事に乗り切
つた教え子たちが、あるいは国連の職員に
なつたり世界銀行に就職したり、あるいは
コロンビア大学など海外の一流大学の大学
院に進学したり、また、ジャーナリズムや
企業の第一線に飛び立って行つてくれるよ
うになつた。

しかし、そうした成果は、私自身に照ら
してみても、いずれも反復と持続以外には
なく、それは才能教育の根本と相通するも
のであろう。

才能教育の体験者がみずからの将来を選
択するに当つて考えるべき問題の一つは、
結局、受け手の側の冷静な自己判定と、長
期に亘る幼時の蓄積をいかに自分の生涯に
活かすか、という点にあるといえるのかも
しれない。こうした問題点が自覚されつつ
それぞれの個性を活かす道が発掘されてゆ
くとき、才能教育は二十世紀の人類が到達
した現代の生きた文化遺産として、さらに
大きな普遍性を獲得してゆくのではなから
うか。

お前が監督ならオレは大統領

在ニューヨーク 望月謙兒



小沢征爾氏

私みたいに、永年外国に住み着いている人間が故国を振り返って見る場合、時たまそこで、腑に落ちない、不可思議な出来事に遭遇することがある。

それは、つい最近訪日したシンシナチ・レッズの、対全日本野球戦績からもうかがえるように、こちらの大利ーグで投げさせれば到底「使いの」にならない一青二才投手の契約問題で、政治家を含めた日本中大騒ぎを演ずるといふ珍現象もさることながら「もつともこの騒ぎなど、「日本は平和なんですよ」という証左とも受け取れないことはないし、むしろ慶賀すべきこともかも知れないけれど——私自身の身近でその最たる例を挙げさせて貰えば、それは言

わずもがな、我が「鈴木指導法」に対する評価である。

毎年十月になって、十人の子供が訪欧米する度に決って実感させられることの一つとして、「一体、あの演奏旅行が日本国内で可能であろうか」ということがある。訪問先各地の主権者との契約以外、一銭の寄付も仰がず、二十人近い一行の太平洋の往復旅費、その他の諸経費を差し引いても、なお赤字を出さないとこの事実、この物価高の折全く啞然とさせられるし、日本国内であれば、さしずめ僅かな国内旅費の調達一つをとつても不可能であろう。即ち、極めてユニークな革新的思考法に対する、日本人と、特にそれに敏感な米国人の価値観の相違である。

とは申せ、当地ニューヨークのジュリアードの教授陣の中には、特にプロの見地から鈴木指導法に対する辛辣な批判者もかな

り存在する。その風当りの強さたるやあたるべからざる勢いであるが、これらの教授連と激論をかわした私が、何故か後味の悪くない、さわやかな気持を抱かせられるのには、私自身が、それらを「筋の通った批判」として理解出来るという事実とは別に、そこにはもつと根本的な、確乎とした理由が存在する。「しかし……」と、この大先生がたは大論争の終りを必ず次の如くしめくくるのである。「だからと言って、私に『子供を指導しろ』と言われても、とても鈴木先生の真似は出来ないし、先生の足元にもおよばない」と。即ち、これらの先生方の批判は、特に幼児に対する鈴木指導法の長所は長所として、その威力とともに、十二分に認めた上での批判なのである。

もう一つ身近な例として、故齋藤秀雄先生門下の俊英、小沢征爾氏に対する評価が